

2024年1月31日

2023年度聖路加国際大学大学院
看護学研究科修士論文

題目

(和文) 就学移行期の子どもと保護者の実態を

QOLの視点で捉える

(英文) Transition and Awareness Experienced by

Elementary School's Students and Parents -Focus on Quality

of Life-

22MN032

氏名 吉越聖子

要旨

【背景】幼児期と児童期の移行(transition)は、多くの先進国の教育課程の中心に位置づけられ、すべての子どもと保護者が環境移行するためにどうサポートしうるのかという論点で語られている。日本では、小学校 1 年生の不応問題への対策に始まり、カリキュラム上の「段差」の解消や学びの連続性の確保に重点が置かれている。現行の学習指導要領においても幼児教育と小学校教育の連続性が示され、文部科学省による「架け橋プログラム」が開始されている。しかし、就学移行期の当事者である子どもと保護者の実態を包括的にとらえる視点が不足している。

【目的】保護者へのインタビューを実施し、その意識調査から、就学移行期の子どもと保護者を取り巻く環境や心身に生じている実態を QOL の視点から包括的にとらえることを目的とした。

【方法】第 1 子が小学 1 年生である保護者 10 名を対象とし、1 名あたり 2 回(「年長 1 月頃から 6 月末までの生活全般」、「初回インタビュー以降、7 月末までの生活全般」)の半構造化面接を行った。対面では IC レコーダーにて録音とメモをとり、オンラインでは録音・録画機能を使用し、逐語録を作成し、分析の焦点である QOL に関わる語句に注目し分析した。分析には質的データ分析手法である SCAT(大谷 2008,2011)分析を用いた。本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会において承認を得て行った(承認番号:23A-018)。

【結果】保護者 10 名の 7 月および 8 月の各ストーリーラインと理論記述が得られた。理論記述を移行期の保護者および子どもの QOL に影響している領域ごとのサブカテゴリーに分類し、4 つの適応感(予想準備あり・なし/適応感あり・なし)のカテゴリーに整理した。4 つの適応感の主な特徴として、①予想準備ありー適応感あり:友だちの存在による安心、②予想準備ありー適応感なし:子どもと保護者の疲労感、③予想準備なしー適応感あり:食事、睡眠による心理面への充足感、④予想準備なしー適応感なし:学校の情報提供と連携機会の不足、が明らかとなった。

【結論】就学移行期の子どもと保護者を取り巻く環境や心身に生じている実態を包括的にとらえるために、QOL の視点をもってとらえることで、適応感に影響を与える QOL の領域が明らかとなった。同時に、以下のような二つの課題を提示するものとなる。第一に、就学前に予想や準備をしても生じる子どもの身体、保護者の身体、心理的負担が挙げられる。第二に、「理想の夏休み像」、「学童利用への罪悪感」、「母親意識」等から生じる、初めての夏休みを迎える保護者の不応感および QOL の心理的領域の低下の課題である。本研究の課題としては、保護者の性別や就労の有無による分析ができていない点、2 回のインタビューの分析による個々の変容に対する考察を深められていない点、保護者と子どもの適応感の差異の分析を行うことができていない点を挙げることができる。